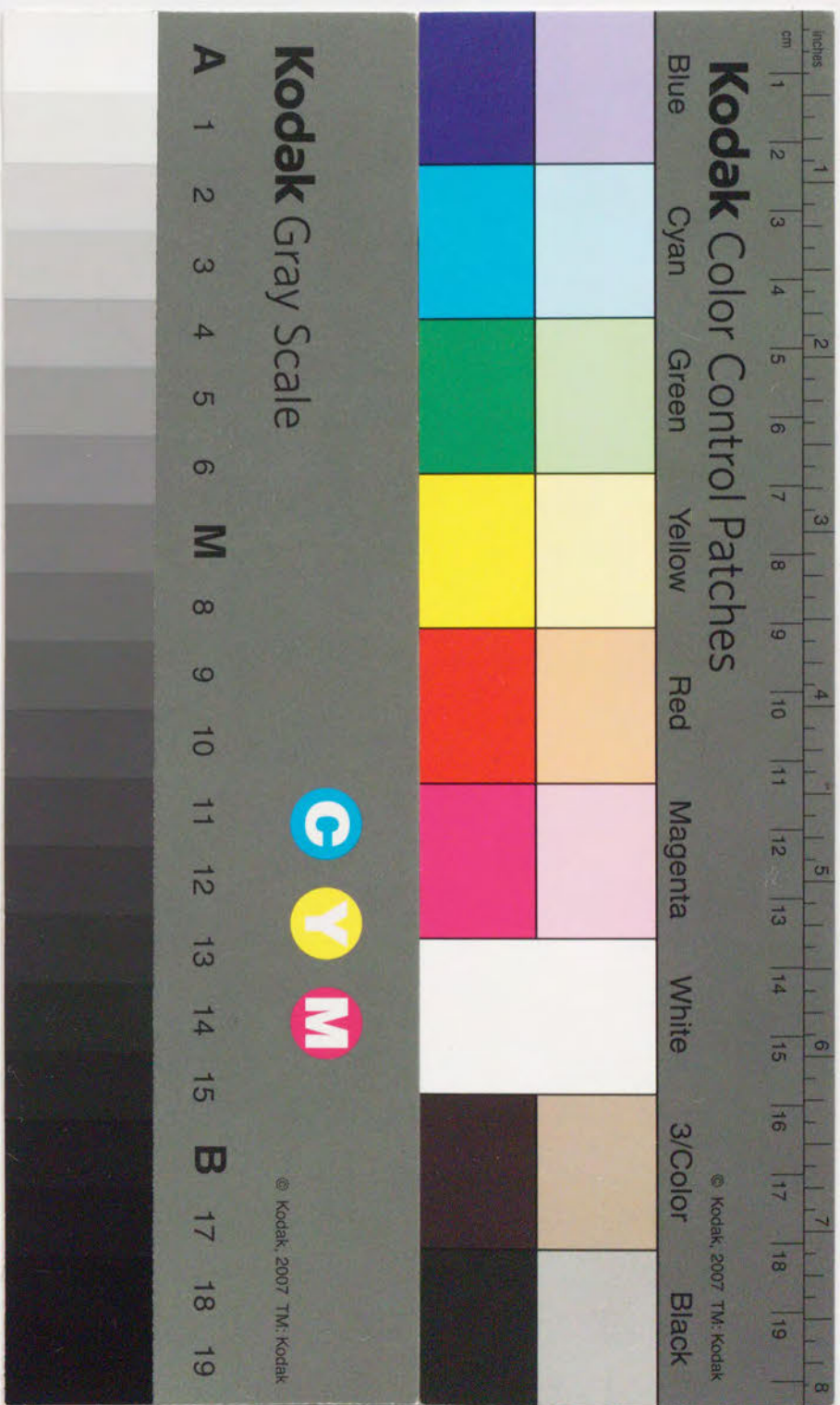




二十四日

一 范德望

二 范德望

三 范德望

四 范德望

五 范德望

六 范德望

七 范德望

八 范德望

九 范德望

二十四義上

一 菟道皇子

二 壹岐直真根子

三 和氣清麻呂

四 杳杞左大臣

五 藤原仲盈

六 源重成

七 小松内大臣

八 渡邊競

九 三浦義明



十土肥実平

土杵潤重満

土中原能景

土藤原忠衡

西塔弁慶

五藤原忠満

土河津兄弟

土村上義輝 附義隆

土藤原重純

土萬里小路中納言

菟道皇子

日本記十一



菟道雅郎子も應神天皇の末の皇子
なり。神母を宮主宅媛といふ皇子なり。い
けあきすすめれてかこくも一王の法と
なり。くみ神もめて。りやーと
あそーはーり。天皇十六年。秋八月
百濟國より河直流に人來り。乃架。經無
とく。とく。架。はまよ。あ。と。あ。と。
人とも。とく。同。上。辛。丑。二月。百濟國

一とあるが、然るにいふに及んで、このあとも
 同く山守命の對面とすべしといふ
 主神と大熊勢との言とあるに及ぶ
 て、此の言は、熊の言なりといふこと、荒道の
 皇子と熊と、大熊勢と、太子の
 浦と、河川の言なり、半次郎といふ
 主神と、山守命と、山川林井といふ
 言なり、同く、同く、同く、同く、同く、同く、
 同く、同く、同く、同く、同く、同く、同く、
 同く、同く、同く、同く、同く、同く、同く、

思ふふやたりて帝位と一うしりて
 して曰うきこふをて万民と
 治るは天の美事とて地の富るはと上
 と致へる心は是は百姓よりこひて
 やるありやけりも才あり文致も
 いふとして翻の修とほつて事業の
 むらんや大王ハ沛生れもかこたに
 仁孝の徳はひもきと致してあふ
 ちあふるを天中の君とす

道ふ興？のてまにゆもねえきふ位と也
けりさるあまうてふ〜あはひつこ
おほきさきわをもくせや〜とら年
少きわ付ふ海人けりて解魚いさなのみと
とも〜菟道の宮ふつてさうりみむ
太る海人ふせきもの〜て我を天白ふ
けりもまれわらう〜て難波の宮ふを
〜大跡勢きも〜返〜て菟道
の宮ふさう〜ら〜むりのうふらの

あつゝ鮮魚毎三あふれぬ太子曰我兄主
の沖志と奪ふ魚ととれぬと云れぬ
生て天のりととれぬと云れぬ
と云れぬと云れぬ大鯨勢をとおと
ふと云れぬと云れぬと云れぬ
荒道の山と云れぬと云れぬ
末社ふと云れぬと云れぬ
沖事と云れぬ

清麻呂と姓ハ和氣光祿大夫なり 言此
天皇ヲ刺道鏡法師と電書をうけり
一太宰主伴阿曾麻呂道鏡を威勢
の付ふとて之をこむ所ついでに宇治後
の託宣と稱して道鏡を帝位におけり
あまたを天下太平ならんといふ道鏡上
ろに到りて天皇よりふ天皇詔をう
けりとも我國を祚代より今ふまゝと
子孫に傳ふとてついでに皇室をまゐる

今とて言ふれにけりといふとて福の
事と宇治の祚をうけりといふとて
天皇和氣清麻呂と死して曰ふ備大祚
の夢の告りりゆと使して宇治をま
へてとて神託とていふとて
まふ清麻呂追ふとて道鏡人といふ
りといふとてあやうといふとて
我ふ帝位とていふとて否やといふ
備大祚といふとて我は位をけゆと

大臣とありて國の政を治るるも人々を近き事
りしむるも氣を失ふべしとて物とつら
きうし口ふもとけてねども清麻呂神
宮ふ清てりふ大祓詭宣して曰我國
を開闢するにこのうき君臣とてまじき
臣とてき君とてまじきとて天津日嗣
のまじきも白皇統とてまじきとて
まじきものも角とてまじき清麻呂神
宮ふ清てりふ大祓詭宣して曰我國
を開闢するにこのうき君臣とてまじき
臣とてき君とてまじきとて天津日嗣
のまじきも白皇統とてまじきとて

天皇もいと興ふくねるゝやまを道鏡は
 いりて昭面きあふ愛して大息つて
 清麻呂と云えけるまの進己まら
 せといひ祇院といはるるへ死
 罪ふけふ者い云天皇にわとあるそ
 を悔ひて其足の筋として大隅の國へ流

藤原朝河清麻呂と云ふに或一刑部
藤原朝河清麻呂と云ふに備後國の秋
と云ふ清麻呂に配所をたつて其後
光仁天皇位ふつて清麻呂帝
都ふと云ふ

枇杷左大臣 今考物志サ内四十二卷

藤原の仲平と昭宣との次第あり御母
中院の大臣と云ふ一大臣の位あり十年

うねと哲一枇杷左大臣と云ふに
天慶の中十一月天文博士大将の早と
紀と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
左大臣の大将と云ふと云ふと云ふと云ふ
左大臣と枇杷左大臣仲平と云ふと云ふ
仲平の甥小野宮実頼と云ふと云ふ
春日社山科寺と云ふと云ふと云ふと云ふ
右大臣大寺法藏原都と云ふ仲平の
の師と云ふ大将の位と云ふと云ふと云ふ

沖舟つが煮あやして七十余あてれり

藤原仲盈

仲盈と姓は藤原、中務卿とふ、多田の
波仲のまはる、満仲みちか佛法とてり、
りりあて、二部あり、一女沖前と僧ふ
えとて、ふい敷山のやちて、学問とてせきぬ
あふ、一女沖前れあふ、いふも、武士のな
とて、そ侍とあり、いふも、いふも、いふも、

て、て敷山ふちて、てお久武士の、てお久武士の、
さして、てりて、て佛の、ていふも、
まて、て一女沖前の、ていふも、
ふんとて、て波仲天名の、ていふも、
りふ、て一女沖前、ていふも、
あやうこととて、てお久武士の、
たて、ていふも、
善が持の、ていふも、
とて、ていふも、

ひきこもーアそ仲多うあふからきぬ満仲
いふて仲多とーてそこいふさーむ仲多
福んらふいふあられともあうーを満るも
あきしうひはうのとそそで暫きしうふ
仲多をけきとねうきとそあの沖今ふ
つきうきうきうきうきうきうきうき
を満るーねいふうきうきうきうきうき
りやうーあふの沖あふ似きうきとーも
同ーくあうー十うきあふうきうきとーも

まろ、何老の身此志そらうきもあふぬへき
ん此あふぬそあふの沖あふいふていふ成ーき
あふうきもいふあふていふあふきとあふ
あふいふあふいふあふいふいふーとむ
うふあふいふうきもあふの沖あふの満仲云
の沖あふいふいふいふいふいふいふいふ
てまろきとあふてあふてあふてあふてあふ
とあふーあふきとあふ仲あふの父の道ふうき
さすあふの沖あふあふあふあふあふあふ

とけうーまうんとうふてなてかーおやせふ
あううんとうまきば不忠ありおやせとうむ
くハ義少何うぞ我んうまきてせんして
あうを義と守りて命しとうつたはのそ
あう汝英の沖前の沖令ふとうまき
かーくぞまき寿丸うまきーけふら
まうひんあうおれあふうううまきの主の
まあふ命しとうつたはううまきーかあ
かゆら日ハ主君の沖令ふとうまきー

の海一の沖志と阿波一うまきー
れあうんて侍らび年月まふり
ひうー母ふりううまきーわまき
のうまきひあううまきー母とやう
まうんあうーのうまきー
ううまきー仲島なるのんうーとまき
てううまきーうまきーうまきー
ひう母ふううまきーあうまきーあう
うまきーまき丸うまきー柔弱あり

[illegible]

沙路のうきはちねくたつてさきふあゝ
 けし、さけりぬてふとてあゝいぬひと
 あやましくもさるれは志のひわねが家
 なる海あふ一首とめだれさおふう又和
 ふさづり、そは木より出るもゆきむいと
 つらうとして、うらふお皮とさきまけを
 ーとくみぬきとせうく泥けいていつこも
 こやあら、けりさあきら仲登太りとけ接て
 まゝさきとも候ふむちあさうりありき素見

ありては、清義の軍利とありて、清義
法外におもひて、青葉の陣ありて、清義
し、尾州野ありて、清義の國人とありて、清義
俄に起て、福徳の典殿ありて、清義
久、嫡子とありて、義平、次男、中宮、大進、義
三男、右衛門、依頼、依頼、大輔、三男、依
平賀、平賀、義宣、鎌田、政全、全平、依
八人あり、清義の戦ふ、まはれ、清義とあり
ありて、清義ありて、清義ありて、清義

ありて、清義の軍利とありて、清義
法外におもひて、青葉の陣ありて、清義
し、尾州野ありて、清義の國人とありて、清義
俄に起て、福徳の典殿ありて、清義
久、嫡子とありて、義平、次男、中宮、大進、義
三男、右衛門、依頼、依頼、大輔、三男、依
平賀、平賀、義宣、鎌田、政全、全平、依
八人あり、清義の戦ふ、まはれ、清義とあり
ありて、清義ありて、清義ありて、清義

多の都く行をゆふ

小松内太良 盛衰記

主盛とたねつて小松原とて平遠盛のそ
弟より治承のも一先の比上皇の電に於て
細と成親平氏の夢といひてかの一族と
亡えしとてふ遠盛入るやうて大ふあて
是とわたりやうてさうなるといひて内府
海とふはひし夢の山つとていふさうなる

主らまらに治承とていふさうなるといひて
くあつとていふさうなるといひて内府
入るはとていふさうなるといひて上皇の
まうとていふさうなるといひて平遠のつと
とていふさうなるといひて平遠のつと
西の東の結ふりつとていふさうなるといひて
是とていふさうなるといひて小松原とていふ
のの内府とていふさうなるといひて内府
さうとていふさうなるといひて内府とていふ

てふやうのちうすもそと既に入らば甲申の
し、いひやうふれふ内府何ううら
るゝおなれまふそとちうすもそ
こもそれ事ありまふそとひふ近
ちうすの職ふつううらめうあ
我^がもそとちうすもそとちうす
そとちうすもそとちうすもそと
礼義と知らふと似たりと相
心付たりとちうすもそとちうす

今歌もかゝて月をよみていふもあらうとて
 肉ふきをゆひてかゝるもつゞけおほきとて
 一うふれもひいてひりねむれもやあらん
 後老のうふうまをすもちわの衣ひうけて
 お合のひりり入るもやあらんねもむき
 ありとて流るるまゝひりねむれもあき
 けうひて双眼もあきとてまゝうとて
 あきらくともものもあきとてあきら
 てねうとて一族のうとてあきらとて

やど末の軍を、いふかゝりありて
り、ゆるる内府や、ちとくけりて、お衣の
袖より墨紙とりて、ちつちあうて
おへらひて、のをさぬひりたり、右の細き
は、くづしむけり、げん親と見え、まじり
なれども入けり、そに我れも、天竺大衆の学
縁國のりり、とあり、わたくし天竺根その
赤米政の補佐なり、よりの、大政の家
のあり、甲寅といふ年も、さうけり、すな

佛つゝ入をぬいすゝゆゑなり、法佛の解脫
 憧おの法衣とわづよとて、忽ち戒衣と爲し
 たるや、内を破戒、ちがひの罪となす
 しかるものなりと知りて、たゞてわづれを
 ねりまひしや、やとて、あをわづれに
 知りしや、まゝなりとて、あをわづれに
 しかるものなりと知りて、たゞてわづれを
 ねりまひしや、やとて、あをわづれに
 知りしや、まゝなりとて、あをわづれに